

## 翻訳:

スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』

序文, 第1章及び第2章翻訳

Translation of Preface, Chapter 1, and 2 of Sultān Valad's *Ma'ārif*

井上 貴恵  
Kie INOUE

### I. 解題

#### 1. スルタン・ヴァラドについて

本稿はバハーウッディーン・ムハンマド・ヴァラド (Bahā' al-Dīn Muḥammad Valad d. 1312) 著、『マアーリフ』の序文から第2章までの翻訳である<sup>(1)</sup>。著者は、その本名よりもスルタン・ヴァラド (Sultān Valad) との通り名、あるいはルーミー (Jalāl al-Dīn al-Rūmī d. 1273) の息子として広く世に知られたスーフイーである<sup>(2)</sup>。

父であるルーミーに比すと、スルタン・ヴァラドの知名度が低いという事実は否めないが、殊にメヴレヴィー教団という観点から考えるのであれば、彼の果たした役割は決定的であり、教団が彼に負うところは大きい (Lewis 2008, 235)。というのも父ルーミーの死後、弟子を取りまとめ、メヴレヴィー教団の実質的な運営者として教団の指揮を執ったのはスルタン・ヴァラドであったからである<sup>(3)</sup>。彼はルーミーの死後40年余りの間に、一家の歴史を丹念に整理して執筆し、父の伝説の保持、普及に努め、一族の血統に基づくメヴレヴィー教団の系譜の管理、教団運営、発展に寄与した (Lewis 2015, 23)。弟子たちからのスルタン・ヴァラドに対する評価は非常に高く、シャイフとしての宗教的な才能はもちろんのこと、教団生活のような実務面での活躍につい

---

<sup>(1)</sup> タイトルである『マアーリフ』は、同書に付された特有のタイトルではなく、ルーミーを中心とする血族集団においてシャイフと認められた人物の説教や説話を集めた形式の書物に対し伝統的に付されてきたタイトルの1つである (Sultān Valad 1988, 19-20)。よって『マアーリフ』という1つのジャンルと考え、カナ書きのままとする。

<sup>(2)</sup> スルタン・ヴァラドはルーミーと最初の妻の間に1226年に生まれた長男である。ルーミーの父であるバハーウッディーン・ヴァラド (al-'Ulamā' Bahā' al-Dīn Valad d. 1231) の名にちなみ、バハーウッディーン・ムハンマド・ヴァラドと名付けられたという (Schubert 1997, 858)。ルーミーにはスルタン・ヴァラドの他にも息子がいたが、特にスルタン・ヴァラドのことは「体格 (khalq) も性格 (khulq) も他の誰よりも私 (ルーミー) に似ている」と言って、非常に可愛がったという (Aflākī 1980 Vol. 2, 785)。

<sup>(3)</sup> 1237年にルーミーが没すると、当時教団員の中でも特にルーミーからの信頼の篤かったフサームッディーンが一時教団の長となった。フサームッディーンの死亡に伴い、1284年からスルタン・ヴァラドが教団の長となった (Lewis 2008, 231-232)。

でも弟子らが多く報告していることから、教団運営者としての才覚にも着目すべきであろう<sup>(4)</sup>。事実、彼の時代にメヴレヴィー教団の教団員数は右肩上がりに増え続け、コンヤの施設だけでは手狭になったことで多くの支部を持つことになり<sup>(5)</sup>、現在も各地に教団の支部が残存しているのである。

## 2. 『マアーリフ』について

現在スルタン・ヴァラドの真作であると目されているのは4編の詩と<sup>(6)</sup>、一作の散文作品『マアーリフ』である。同書は教団のシャイフとしても活躍したスルタン・ヴァラドの56の説教と講義とをまとめたものであり、彼が弟子に説いて聞かせた教えがどのようなものであったのかを窺い知ることが出来る。スルタン・ヴァラドの『マアーリフ』は、説教集という形式に関し、父であるルーミーの説教集『ルーミー語録』(*Fīhi māfīhi*)に倣っており、また『マアーリフ』という作品名に関しては、彼の祖父であるバハーウッディーン・ヴァラドの同名の説教集に倣っている(Lewis 2008, 241)<sup>(7)</sup>。『マアーリフ』中には、ルーミーの説教集に登場した例え話をスルタン・ヴァラドがさらに分かりやすく解釈を行っている部分も多く見受けられることから、父の使用した説教を用いてスルタン・ヴァラドが説教を行う機会も多々あったということが分かる。そのような意味で同書は、ルーミー一家に伝わる説教集としての側面も併せ持つと言えるだろう<sup>(8)</sup>。

<sup>(4)</sup> 父であるルーミーにも劣らないスルタン・ヴァラドの教えの素晴らしさに弟子らは驚嘆し、彼の教えによって無知な者が知者になったとして、彼は素晴らしいクトゥブ、偉大なる王であるとの称賛の言葉を投げかけている(Sultān Valad 1936 Vol. 2, 130)。特に教団内外での人間関係の円滑化に一役買ったようで、『ヴァラド版マズナヴィー』には以下のような弟子の言葉が記録されている。

(スルタン・ヴァラドは) 困難な問題を解決してくださった  
 このような贈り物はいかなるシャイフも与えて下さらなかった  
 敵対する者は皆こぞって友となり  
 憎しみや憎悪の念は消え去った (Sultān Valad 1936 Vol. 2, 130)

<sup>(5)</sup> スルタン・ヴァラドによれば教団のメンバーは男女を問わず増え続け、全員がコンヤの施設に入りきらなくなったという。そこで教団の支部がアナトリアの各地域や、他の地域にも置かれ、そのそれぞれにシャイフが置かれた。徐々にこれらの支部はメヴレヴィーの集団として知られるようになったのであり、スルタン・ヴァラドがメヴレヴィー教団の各地への拡大に一役買ったことが分かる(Sultān Valad 1936 Vol. 2, 155-157)。

<sup>(6)</sup> 以下である。(執筆年代順)

1) 『始まりの書』(*Ibtidā'-nāma*) 別名『ヴァラド版マズナヴィー』(*Masnavī-i Valad*) あるいは『ヴァラド・ナーメ』(*Valad-nāma*) と呼ばれる。2) 『葦の書』(*Rabāb-nāma*) 3) 『終わりの書』(*Intihā'-nāma*) 4) 『詩集』(*Dīvān*)。各作品の内容、書誌情報などについては、(Lewis 2008, 236-241)に詳しい。

<sup>(7)</sup> またスルタン・ヴァラドの祖父であるバハーウッディーン・ヴァラドの弟子で、一時ルーミーのメンバーであったブルハヌッディーン・ムハッキク・ティルミズィー(Burhān al-Dīn Muḥaqqiq Tirmīzī d. 1240 or 1241)も『マアーリフ』を執筆している。

<sup>(8)</sup> スルタン・ヴァラドは、父ルーミーの例に倣い作品を執筆しており、『マアーリフ』との名や、説教集という性格からも、父や祖父の前例に倣おうという意味が見受けられる。スルタン・ヴァラドは『ヴァラド版マズナヴィー』の序論において、「私の父は私を、他の兄弟や弟子、知者らよりも[こう言って] かわいがってくれた。『お前は体格も性格も他の誰よりも私(ルーミー)に似ている』。そし

本稿の底本として使用したのは、テヘラン、モウラー社から1988年に出版された Najīb Māyil Haravī 校訂版の『マアーリフ』である。Māyil Haravī 版は5つの写本を参考にして校訂されている<sup>9)</sup>。また翻訳の際には Eva de Vitray-Meyerovitch による『マアーリフ』の仏訳も参照した。しかしながら、仏訳版は底本にした写本の情報がなく、仏訳を見る限り Māyil Haravī 版が多くの部分を依拠していた写本とは異なるものを参照していた可能性が高いと考えられる。今後これら写本を収集し、相互に比較検討することでより正確な翻訳を目指したい。

## II. 翻訳

### 0章1節<sup>(10)</sup>

預言者 (anbiyā') と聖者 (awliyā') は各々、[預言者に特有の] 奇蹟 (mu'jiza) と [聖者に特有の] 奇蹟 (karāmāt) <sup>(11)</sup>を以てして特別であり高名であったのだが、学者ら ('ulamā') や知者ら (muḥaqqiqān) は [彼らについて以下のように] 言っている。「至高なる神 (ḥaqq) は、彼らの各々に何らかのものをお許しになった。神が [彼らのうちの] この者へ与えたものは、あの者へお与えにはならなかったのである。[彼らの] 各々に [神は] 別々に統治権 (vilāyatī) を与え、

---

て私めは、できるだけ尊師 (ルーミー) の教示に沿うよう努力した。というのも、『アッラーは誰にも、その能力以上のものを負わせられない』(Q2:286) し、父親に最も似ている者は、全く反対ではないからである。尊師に従い、追従し、彼に似るように私は努力した。父は異なる韻律で詩を書き、四行詩も書いた。私もそれに沿って、詩集を書いた。私の友人らがついに懇願して、『ルーミー——神よ彼の偉大なる神秘によって我々を清めたまえ——のように君は詩集を書いたのだ。彼のようにやはりマスナヴィーでも書くべきである』と言った。これが理由で私は尊師に従って、尊師のようになり、690年4番目の月からこのマスナヴィーを書き始めた。私のような卑しい者が死んだ後も思い出が残るように」と述べている (Sultān Valad 1936 Vol. 1, 3-4)。『マアーリフ』は説教集であるために執筆の経緯などが序論部で明らかにはされていないが、このようなスルタン・ヴァラドの記述からは、ルーミーを中心とする一族の作品群の伝統化、継承、伝播に対する強い意志が感じられよう。なお、以降本稿においてはクルアーンの訳は Q 及び該当の章句の番号で記す。

<sup>9)</sup> 以下である。1) Tihṙān, Kitābkhāna-i Markazī-i Dānīshgāh-i Tihṙān, MS 1750. ただし校訂者はテヘラン大学所蔵のものではなく、Aṣghar Mahdārī 氏の個人図書館が所蔵しているものを使用したと記しており、テヘラン大学にはそのマイクロフィルムが収蔵されているとしている。2) Konya, Mevlana Mūsesi, MS 2149. この版はテヘラン大学中央図書館にも所蔵されている。(Tihṙān, Kitābkhāna-i Markazī-i Dānīshgāh-i Tihṙān, MS 318)。3) Dabīrī-nīzhād 氏個人所蔵写本。4) 所蔵館情報なし。'Alī ibn Yūsuf al-Karkarī (生没年不詳) の著作と共に写本内に記述されていたもので、状態が悪く、Māyil Haravī 版ではあまり参照しなかったとされている。5) 1955年に出版されたシェイフ・アブドラー・ハーエリー (Shaykh 'Abd Allāh Ḥayrī d. 1937) 版の *Fīhi mā Fīhi* において部分的に紹介されていたものである。但し非常に欠損が多いとの言及がなされている。他にも、İstanbul, Hacı Selim Ağa Yazma Eser Kütüphanesi, MS 567などが知られている (Sultān Valad 1988, 22-24)。特に Māyil Haravī 版『マアーリフ』が多く依拠したのは1)及び2)である (Sultān Valad 1988, 22-24)。本稿では『マアーリフ』訳出にあたり、写本間で語彙などに差異があるために特に留意すべきと考えた場合は本稿において Māyil Haravī 版に記された各写本間の差異についても記述した。

<sup>(10)</sup> 0章は序論部に該当すると思われるが、特に序論との記述はないため、Māyil Haravī 版の記述のままに0章と記すこととする。

<sup>(11)</sup> 以降 mu'jiza と karāmāt については、預言者に特有の奇蹟 (mu'jiza) と聖者に特有の奇蹟 (karāmāt) のこととして扱い、訳語上での区別はしない。

別々に世界を「与えたのである」]。[一方] ヴァラドは「以下のように」述べている<sup>(12)</sup>。「預言者ら各々——彼らに平安あれ——のためにこそすべての奇蹟とすべての力 (qudrat) はすっかり完全に存在したのである。正に「預言者ら」各々のために時宜に応じて「神は」とあるものを顕わにして見せたのであり、「それは」彼らの必要と要望に応じてなのである。以下の例えによって「それは」明らかとなる。つまり、例えば法学 (fiqh), 天文学 (nujūm), 医学 (ṭibb), その他の学問に精通している学者が、とある病人を治療する時に、これ「だけ」を知っているのだとは言わないであろう。つまり、ただその時機や必要となる方法に応じて、その1つの知識を見出したまでである。あるいは金銀細工 (zar-garī), 靴の製造 (kafsh-garī), 裁縫 (khayyātī) や同様の仕事に長けた者が人々のために洋服を縫う時、「その人は」これ「だけ」を知っているとは言われないのである。また小川が水車 (āsiyā) を動かすとき、理性ある者は、この小川はこの水車だけを回すのであるとは言わないであろう。この小川は実に無数のことが可能なのである。服を洗ったり、畑や庭を生き生きと青々とさせたり、植物や花を育てたりする。しかし、この特定の場においては、「小川は」水車を動かすのである。もしもこれ「小川」を沙漠や庭の方へやるのであれば、この小川は上記のような他の仕事を成すだろう。よって、各預言者らの中にすべての奇蹟は存在していたのであり、各預言者の「周囲の」人々のために、また彼らの必要に従って、「預言者に特有の」奇蹟や「聖者に特有の」奇蹟が顕わになったのである。よって各預言者らが有していたものはすべて、「預言者に特有の」奇蹟や「聖者に特有の」奇蹟に属するものである。「預言者」一人ひとりに対しすべての奇蹟は存在したのであり、彼ら各々が単に何らか「の奇蹟」を顕わにして見せたとしても、他の奇蹟「の現出」も可能なのであった」。

## 0章2節

預言者——彼に平安あれ——は神の顕れの間 (mazhar) であり、神の道具 (ālat) である。神の御前で消滅し、残存することはないのであるが、神は彼を通して様々なものを顕わにしている。ところで神はすべてのことに全能ではないなどと言うことは出来ないのであるから、行為者は神で、彼ら(預言者ら)は書き手 (kātib) に握られたペン (kilk) のようなものである。ペンの成すいかなる図も、それは書き手が成したことなのである<sup>(13)</sup>。また彼らはとある者の手の中の弓 (kamān) と矢 (tīr) のようである。矢は射手によって弓を通して放たれるのであり、弓によって放たれるのではない。そのため、至高なる神は以下のようにおっしゃっているのである。「あ

<sup>(12)</sup> 『マアーリフ』はスルタン・ヴァラドの説教集であり、弟子筋の者がスルタン・ヴァラドの説教を口述筆記しているためにこのような言い回しが使われていると訳者は考える。スルタン・ヴァラドの父であるルーミーの説教集も弟子による口述筆記の形式である。なお、仏訳版では「わが父(ルーミー)は言っていた」との訳が充てられているが、Māyil Haravī 版が参考にした5つの写本においては、注が付されていないことからこの部分に差異は認められないようである。この部分に関しては今後写本を収集し更に検討を加えたい。

<sup>(13)</sup> ルーミーも同様の例えを用いている。「よってすべての要因は神の権力の手握られた筆のようなものである。「筆を」動かすのも書くのも神である」。この例えを用い、ルーミーは、諸事の一次的な原因を神に帰している (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 225-226)。

あなたが射った時、あなたが当てたのではなく、アッラーが当てたのである」(Q8:17)。[つまり]ムハンマドよ、お前の射ったあの矢はお前が射ったのではない。それを引いたのは我々、つまり神である。つまりお前の成すことはすべて、我々の命 (amr) と指示 (farmān) によるのである。

[では] どのような門 (madkhal) からそのような場に [入れるの] であろうか？我々が事を起こし、我々の望むところと意図とに従って [お前の諸事は] 成されるのであるから、お前から利を得ない者、お前に対し戦いを挑む者は、我々に対しそうしているのである。お前に従順で付き従う者はみな、またおまえに親愛の情を示す者は、我々にそうしているのである。

### 1章1節<sup>(14)</sup>

とある者が言った。「根本 (aṣl) は実践的行為 (‘amal) にあるのであり、言葉 (sukhan) はそのよう [に重要] ではない」。我々は言った。「実践的行為を理解し、熟知していて、我々がその人に実践的行為を見せるべきであるような人を我々もまた見つけたい。さて、君は言葉の徒 (ahl-i sukhan) であるのだから、君とは言葉を交わさないとならない。君は実践的行為の徒 (ahl-i ‘amal) ではないのだから、実践的行為をこのように理解すると良いだろう。[つまり] 君は実践的行為を、礼拝と断食、巡礼と喜捨、ズィクル、瞑想、徹夜の行、神への愁訴、神への慨嘆、禁欲からなると理解してきたが、これらすべては実践的行為ではなく、実践的行為の原因 (asbāb-i ‘amal) なのである。これらすべては君がそれを成す時、君の内で成されるのであり、[それまで] 君がそうであったものから君は変化するであろう。クルアーンで以下のように [神は] おっしゃっている。『本当に礼拝は、(人を) 醜行と悪事から遠ざける』(Q29:45)。礼拝は過ちや罪、悪事、欠点から君を清浄 (pāk) にする。よって実践的行為とは、それらから君が清浄になるもので、君が清浄にならなかったのであれば、君は礼拝をしていなかったということだ。このように預言者——彼に平安あれ——もおっしゃっている、『立ち上がり、礼拝せよ。あなたは礼拝をしていなかったのだから』と。礼拝をした人に対して [預言者は] 『立ち上がり、礼拝しなさい。あなたは礼拝をしなかったのだから』とおっしゃったのである。すると再びその人は立ち上がり礼拝をした。預言者は再び『あなたは礼拝をしていなかったのですから、立ち上がり、礼拝しなさい』とおっしゃった。そして最後に預言者はおっしゃった。『気持ちが伴わないのであれば礼拝ではない』<sup>(15)</sup>。

### 1章2節

よってこの定められた [礼拝などの] 形式 (ṣūrat) や方法 (ravish) というのは、それを行うことは実践的行為の本質ではない。実践的行為は、とある状態から [他の] 状態へと変化 (taghyīr)

<sup>(14)</sup> 本稿はルーミーの行った説教を基にしていると考えられる。前半部はルーミーの説教とスルタン・ヴァラドの説教にあまり相違はないが、結論部においてルーミーは、「最近の礼拝、断食といった行為は行為の外側であって、行為の真意とは内側である」とむしろ内的信仰の重要性を説いたのち、とはいえ言葉もまた重要であるとしている (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 74-75)。

<sup>(15)</sup> スーフィーのしばしば引用するハディースである (Furūzānfar 1956, 5)。ルーミーは説教においてこのハディースを引用している (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 143)。

を与えるもので、精液と胚が、母親の腹の中で1つの状態からまた1つの状態へと変化して、血の塊が胎児になり、ついには人間の顔と形になり、魂を与えられて、生まれて、成長するようになったと同様である。この成長と、とある状態から別の状態への変化とが実践的行為 [の本質] なのであり、上昇 ('urūj) [なのである]。

### 1章3節

そして昇天 (mi'rāj) の真意であると言われているのは以下のようなことである。つまり、[神の] 下僕がとある状態から別の状態へと変化し、最初の心的状態 (hāl) から第2の心的状態へ、第2の心的状態から第3の心的状態へと、際限なく [変化することである]<sup>(16)</sup>。以下のように預言者——彼に平安あれ——もおっしゃっている。「2日間同じ [状態] である者は、愚かである」<sup>(17)</sup>。この現世というバーザールの農民 (kishāvarz)<sup>(18)</sup> である者にとっては「現世は来世の畑である」<sup>(19)</sup> [にも拘らず]、2日間を同じように過ごすのであれば、[その人は] 愚かであろう。1日1日を、一瞬一瞬を、より高め、より良くしていかなければならないのである。実践的行為の真理 (ḥaqīqat) とは以上のことであるが、このような実践的行為を一体誰が理解できるというのか。このような実践的行為 [の真理] については、神以外は知ることはなく、理解することもない。「我が聖者は我が円蓋の下におり、私以外誰も彼らを知らない」<sup>(20)</sup> の [アラビア語のハディースの] 通りである。[つまりそれはペルシア語では] 我が聖者は我が円蓋の我が妬み (rashk) の下におり、私以外は誰も彼らを知らないのである [の意味である]<sup>(21)</sup>。

### 1章4節

最後に、知識 ('ilm) は、礼拝や断食などの身体的な行い (af'āl) よりも実践的行為 ('amal) により近い<sup>(22)</sup>。というのも、知識が実践的行為と離れると無益なことがあるからである。行いは [知識と] より離れ、より無益になることがあり得る。というのもユダヤ教徒 (juhūd) と偽善者 (munāfiq) は、その [実践的行為の] 外身を [真似することは] 出来るが、信仰の道 (rāh-i dīn) を説いて、神を証明してみせることは出来ないからである。たとえ [実践的行為の外身を] 知っ

<sup>(16)</sup> ルーミーは、誰かが一瞬でここからカアバまで行ったとしてもそれは奇蹟 (karāmāt) ではなく、本当の奇蹟というのは君 (人間) が [精神的に] 低い状態から高い状態へもたらされることである、として人間の精神的な状態が高められていくことを奇蹟であると述べている (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 118)。

<sup>(17)</sup> 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限り六書、及びスーフイー系ハディース集として知られる (Furūzānfar 1956) の中には見当たらなかった。

<sup>(18)</sup> 原文では كشتورز とあるが、誤記と考え上記の通り訳出した。

<sup>(19)</sup> スーフイーらが好んで引用するハディースである (Furūzānfar 1956, 112)。ルーミーは説教においても引用している (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 48)。

<sup>(20)</sup> スーフイーらが好んで引用するハディースである (Furūzānfar 1956, 52, 85)。

<sup>(21)</sup> 『マアーリフ』はアラビア語でハディース等が挿入されると、直後にペルシア語で翻訳が入る形式になっている。元のアラビア語と、スルタン・ヴァラドの付すペルシア語訳が異なる場合があるため、どちらも訳出することとする。

<sup>(22)</sup> Selim Ağa Yazma Eser Kütüphanesi 所蔵の版の記述に従う。

ていて、[真似することが]出来たとしても、その人自身はユダヤ教徒ではないの[と同じこと]である。よってこれまで述べ、明らかにしてきたことすべてというのは、人々がそれを理解し、知っているところの[実践的行為の]方法、教義、規則、信条なのであり、それは実践的行為の要因であって、実践的行為の本質なのではない<sup>(23)</sup>。

#### 1章5節

バルシーサー (barṣīṣā) <sup>(24)</sup>は幾年にも渡り礼拝、神への服従、隠遁などの外的な実践を行った。いかなる禁欲主義者もほんのすこしでもそれ[に比肩しうる実践的行為]をしたことがない[ほかにバルシーサーは敬虔な]のであったが、結局彼は不信仰者 (kāfir) となってしまった。

#### 1章6節

また同様にイブリースも幾年もの間、天において神へ服従してきたが、もしもその外的な実践的行為が彼の内で[内的な]実践的行為として実践されていたのであれば、神の「アードムへ跪拝せよ」(Q7:11; 17:61; 18:50)の命の際に、[それを]実践したろうし、効果があつたらうに。

#### 1章7節

イーサー——彼に平安あれ——は外的な実践的行為を実践しなかった[ように見えるが、]しかしその実、自身の実践的行為を行ったのである。子供の状態 (hālat-i tiḡl) から老人の状態 (hālat-i pīr) へと変化したのであり、ムハンマド——彼に平安あれ——は40年にわたり主張してきた。この主張と靈感 (vahy) について彼はゆりかごの (gahvara) 中で説明している<sup>(25)</sup>。「わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になされました。またかれは、わたしが何処にいようととも祝福を与えます」(Q19:30-31)。

#### 1章8節

よって実践的行為の真理とは以下である。一瞬一瞬君がとある状態から別の状態へと変化し、進歩するようなもので、それはこのようなものである。つまり、[銅を金に変えるという]霊薬

<sup>(23)</sup> ルーミーも、人々の理解している実践的行為は外的なものであり、外的な実践は偽善者であっても出来るとしてそれは実践的行為の真意ではないとしている (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 75)。

<sup>(24)</sup> 長年の禁欲的な生活によって知られる隠遁者である。最終的に悪魔からの誘惑に屈し、神を否定するに至ったとされる伝説的な存在である (Abel 1979, 1055)。

<sup>(25)</sup> イーサーが生まれた際に母マルヤムに対しゆりかごの中から皆に話しかけたとされる以下のクルアーンの章句に基づく。「それからかの女 (マルヤム) は、かれ (イーサー) を抱いて自分の人びとの許に帰って来た。かれらは言った。『マルヤムよ、あなたは、何と大変なことをしてくれたのか。ハールーンの姉妹よ、あなたの父は悪い人ではなかった。母親も不貞の女ではなかったのだが』。そこでかの女 (マルヤム) は、かれ (イーサー) を指さした。かれらは言った。『どうしてわたしたちは、揺籠の中の赤ん坊に話すことが出来ようか』。その時かれ (イーサー) は言った。『わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になされました』」(Q19:27-30)。

(kīmiyā) を銅 (mis) の上に注いだ時に、それが金 (zar) になることが「実践的行為」である。もしも [銅が] 金にならないのであれば、例え 1000 回ハンマーで打ち付けても、どんなに火で熱しようとも、平たく、長く伸ばしたりしても元の銅なのである。金の専門家 (zar-shinās) でない者、つまり実践的行為の形式を眺めて、実践的行為の形式を見知った者は以下のように言うだろう。「もしも世界に金があるとすれば、それは、ハンマーで幾度も打ち付けて、幾度も火で熱して、平たく、長く伸ばしたものである」と。しかし金の専門家はこれら [の見た目] を眺めることはなく、金が混じりけのない (khālis) ものになったのであれば、試金石 (mahak) の上に置いて、受け入れるのである。もし [混じりけのない金に] なっていないのであれば、わずかな金額でも買わない。というのも以下のように言われているからである。「神はあなた方の形式や実践的行為を見るのではない。しかしながらあなた方の心を見るのである」<sup>(26)</sup>。[このアラビア語の意味はつまり、]私、つまり神はあなたの形式を気にかけるのではなく、またあなたの行いも、あなたの言説も [気にかけることはない]。しかしあなたの心の中を眺める。つまり、あなたの心は私への愛でこのようであるとか、どれほどであるとかいった具合に。「そして賢人はその徴だけで充足する」<sup>(27)</sup> [の通りである]。家の中に誰かいれば、一言で十分である [のと同様である]。

## 2章1節

聖者らは神の特別な者、神の選良である。[聖者は] それ自体 [が神に選ばれているの] ではなく、聖者は神の秘密 (asrār) なので [神の選良なの] ある。神を知り、神を理解することは神の秘密を知ることよりもたやすい。この世で君が誰かに会いたい、知り合いになって仲良くしたいと思った時、少しの努力によってその望むところは可能になるだろう。しかしながらその人の心の中にある秘密を知り、理解しようと君が非常な努力をしても、[その秘密を知ること] 不可能であろう。よって人の外面 (ṣūrat) <sup>(28)</sup>を知ることは、その人の秘密を知るよりもたやすいことなのである。

## 2章2節

とある人が知者のもとを訪れ、謁見したいと思った時、少しの労苦<sup>(29)</sup>と努力でそれは達成されるであろう。しかしながらその知者の知識を知りたいと希求した時、彼の知識という宝物 (ganj) から富と財を手にするまでには、長年にわたる艱難に耐え、辛苦を凌がなければならない。

## 2章3節

すべての町で 10 万人もの被造物が神を崇めており、彼らは神に祈願し、神は全能 (qādir) で、

<sup>(26)</sup> スーフィー系ハディースである (Furūzānfar 1956, 59)。

<sup>(27)</sup> 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限り六書、及びスーフィー系ハディース集として知られる (Furūzānfar 1956) の中には見当たらなかった。

<sup>(28)</sup> 本稿では基本的に ṣūrat の語に「形式」の訳を充てたが、この部分は「外面」と訳出した。

<sup>(29)</sup> 原文には سبى であるが、سعى の誤記と考え、上記の通り訳出した。



唯一 (yigāna) で、糧を与える者 (razzāq) であり、訓育者 (murabbī) であり、導き手であり (hādī), 赦す者 (ghaffār) であり、征服者 (qahhār) であると思っている。そして、誠心誠意、精魂こめて心から [神に] 服従し仕えるのである。しばしば人々は以下のようなのである。つまり一部の人は実践的行為を真摯に [成し], また一部の人は [実践的行為を] 怠惰に [成す]。神の英知や神に関する知識の程度が少ない者もいれば、多い者もいる。しかしながらそのような 10 万人もの人の中で正しいシャイフや聖者に頼っている集団はほんの少しであろう。そしてその少しの集団の中でも聖者を良く知っている人というのは 1 人か 2 人であろう。

## 2 章 4 節

以上のことから明らかなのは以下である。つまり、神を崇拝し、知ることは普遍的なのであり、広く万人のためにそこには [神を崇拝し、知るための] 門と道とが存在し、不信仰者らもまた神を崇拝しているのである。

不信仰も信仰もその道における求道者 (pūyān) である

神は唯一でいかなる共同者もない、と言いながら [彼らは神を崇拝するのだから] (30)

72 の分派<sup>(31)</sup>を見てみると、[その各々が] 様々な形式、実践的行為、言葉を通し、皆神を崇拝し、神へ服従しているのである。被造物と人間がいる [現世という] 場とは何 [と素晴らしい場] であろう。[そこでは] 地面や山、石や空、星や月、太陽やちり、空気や水、火などの無機物がみな、君の分からない言葉、君の理解できない言葉、君の知らない言葉で、神を崇拝し、神を称賛し、賛美しているのである。以下 [の章句の通り] である。「何ものも、かれを讃えて唱念しないものはない。だがあなたがたは、それらが如何に唱念しているかを理解しない」(Q17:44)。

## 2 章 5 節

すべての存在物、被造物は神のヴェール (parda) であり、門番 (darbān) であるので、神を崇拝しない人は、神へ顔を向けなくなる。つまり甘い食物や絹の衣服、西陵や中国の逸品は、選ばれし下僕が神への服従と献身とをするのを妨げ、求道者、つまり旅人の追いはぎ (rahzan) に成るのである。しかし結局神への泣訴 (zānī) や、助力を乞うこと (lā-ḥūl) (32)、ズィクルによって、幾人かはこれら追いはぎらの [魔の] 手から [逃れ] 安堵を得る。そして [彼らは無事] 神への服従という荷と貨物とを、充足と受容の宿場 (manzil-i rizā va qabūl) へと届けるのである。しかしながら神の聖者に関しては、偉大なる神はご自身で警護している。それは何人たりとも彼らを

(30) サナーイーによる詩である。但し刊本によっては言い回しの多少異なるものもある (Sanā'ī 2004, 60)。

(31) 「ユダヤ教徒は 72 の分派に分かれ、キリスト教徒は 71 の分派に分かれ、そして我が共同体は 73 の分派に分かれるであろう」のハディースに基づく (al-Tirmidhī 2011, no. 2641; Abū Dāwūd 1974, no. 4596)。

(32) 「いと高く偉大なる神以外に力強いものはない」の語を唱えることで悪魔を祓うことを指す。

も見つけることがないように、彼らを知ることのないようにするためである。つまり、「我が聖者は我が円蓋の下におり、私以外は彼らを知らない」<sup>(33)</sup> [のハディースの通り] である。[その意味をペルシア語にすると、つまり] 我が聖者と選良は我が妬みの円蓋の下に隠されており、それは私以外の誰も彼らのことを見知ることのないためである。それは現世において [以下のように] 現れる。つまり偉大なる王子らが特別な人と凡人とに——彼らは正義の玉座の上に座っているので——皆自身の宮殿に入ることを許し、各々の必要であるところを彼らの宿場や段階 (marātib) に沿ってお与えになり、親切に [なさる]。しかし自身の目撃者らに対し、秘密の息子や娘らを誰にも顕わにしない。そして王子に対して、彼ら (秘密の息子、娘ら) と親しくさせてほしい、仲間にしてほしいという望む者は、王子が自身の意思と意図に沿った人だけを——その人の正しさ (amānat) と敬虔さ (diyānat) を知ったので——親しい者とするのである。

## 2章6節

そこ (神の道) における [信仰の] 妨げ、追いはぎとは神以外のこと、つまり悪魔などである。これらは神へ助力を乞うことやズィクルによって克服される。では神はどの助力の祈念やズィクルによって [悪魔などを] 取り除かれるのか。以下のことは明らかである。つまり、聖者を見出し、彼らを知るとは、神を知ることよりも困難である。神の聖者を知る者は誰でも、もちろん神を知っているのであり、[神を] 理解している。しかしその反対はなく、神を知っている者が聖者を知っているということに関しては、必ずしもそうではないのである。多くの被造物が神を知り、[神に] 仕えている。しかし、彼らは神を知ったり、理解することは出来ない。その上彼らは聖者を見た時に、彼らを敵とし否定するのである。

## 2章7節

最後にマンスール・ハッラージュ (Abū ‘Abd Allāh al-Ḥusayn ibn Mansūr al-Ḥallāj d. 922) について<sup>(34)</sup>、ジュナイド (Abū al-Qāsim ibn Muḥammad ibn al-Junayd al-Khazzāz d. 910)<sup>(35)</sup>やシブリー (Abū

<sup>(33)</sup> 既出。1章3節を参照のこと。

<sup>(34)</sup> スルタン・ヴァラドの著作においてはハッラージュの引用回数は多く、ハッラージュに対する評価はいずれも高く肯定的であり、スルタン・ヴァラドが教団のスィルスィラにハッラージュを含めると指摘する研究者もいる程である (Lewis 2008, 241)。但しルイスがスィルスィラの典拠として指摘した『ヴァラド版マスナヴィー』の箇所を教団のスィルスィラであると同定することに関しては疑問が残り、且つアンブロシオが提供しているメヴレヴィー教団のスィルスィラの中にもハッラージュの名は含まれてはいない (377-378)。とは言えスルタン・ヴァラド著作においてハッラージュへの言及が非常に多いことは事実であり、親族であるルーミーなどを除けば最多の登場回数を誇るであろう。もしも教団のスィルスィラにハッラージュの名を含めるとすれば、ジュナイドやバスターミーらの名を含めるのに比して珍しい事である (Trimingham 1998, 12)。いずれにせよ、スルタン・ヴァラドのハッラージュに対する評価には注目すべきであると記者は考える。

<sup>(35)</sup> ハッラージュは元々ジュナイドの弟子であったが、2人は思想傾向の違いから袂を分つ結果となった (Massignon 1922, 33-38)。またシブリーは、その大胆な語り口や酔語など、思想傾向としてはハッラージュと近かったものの、ハッラージュが処刑される際に彼を侮辱するために彼に会いに行っている。ハッラージュの処刑後、シブリーはそのような行為をしたことを後悔したと伝えられている。

Bakr Dulaf ibn Jaḥdar al-Shiblī d. 946) のような当時の学者や聖者は、彼の外的な部分をもってして彼を否定し、殺そうとし、彼を吊り首に処すことで皆一致し、ファトワーを出し、このような逸材を吊り首に処したのである。絞首台から〔彼を〕下ろしたとき、彼に火をつけ、燃やし、彼の痕跡が残らないようにとその灰を川に流したのである。以下のように言われている。「彼らがなすことすべてにおいて、火の中にも水の中にも「我は神である」(anā al-ḥaqq) と〔の文字が〕書かれた。彼の遺灰は川からふたたび拾い上げられると、再び「我は神である」〔の文字〕を刻んだ。この奇蹟 (karāmāt) を目にし<sup>(36)</sup>、この過去を皆後悔した。この時以来、説教 (va'z) の場においては、彼の名を出し、彼について言及しないと〔場は〕白熱しないのである。最後の審判の時まで、神よ彼を嘉し給え。

## 2章8節

さて、神の被造物に対する使者 (firistāda) であり預言者であるムーサーの状況についても〔上記と〕同様であって、神は彼と言葉を交わされたのである<sup>(37)</sup>。「そしてムーサーには、親しくア

---

(Massignon 1922, 41-43)。

<sup>(36)</sup> ハッラージュの遺灰の奇蹟に関してはいくつか異なる逸話が伝えられている。例えばアッタールはハッラージュの切り落とされた四肢が焼かれると、その灰から「我は真実在なり」の叫びが聞こえたとの逸話を伝えている (‘Attār 1957, 122)。

<sup>(37)</sup> 以降の物語はクルアーン 18 章、ムーサーがヒドルに出会い、知識を乞うという以下の逸話に基づく。

それからかれ (ムーサー) は (岩のところに戻って来て)、われの一人のしもべ (ヒドル) に会った。われは (あらかじめ) かれに、わが許から慈悲を施し、また直接に知識を授け教えておいたのである。ムーサーはかれに、「あなたに師事させて下さい。あなたが授かっておられる正しい知識を、わたしに御教え下さい」と言った。かれは (答えて) 言った。「あなたは、わたしと一緒に到底耐えられないであろう。あなたの分らないことに関して、どうしてあなたは耐えられようか」。かれ (ムーサー) は言った。「もしアッラーが御好みになられるなら、わたしがよく忍び、また (どんな) 事にも、あなたに背かないことが分りましょう」。かれは言った。「もしあなたがわたしに師事するのなら、わたしがあなたに (何かとりたてて) 言うまでは、何事に就いても、わたしに尋ねてはならない」。そこで2人が出発して、舟に乗り込むと、かれはそれに穴をあけた。そこでかれ (ムーサー) は言った。「あなたがそれに穴を開けるのは、人びとを溺れさせるためですか。あなたは本当に嘆かわしいことをなさいました」。かれは言った。「あなたは、わたしと一緒に耐えられないと、告げなかったか」。かれ (ムーサー) は言った。「わたしが忘れたことを責めないで下さい。また事を、難しくして悩ませないで下さい」。それから2人は歩き出して、1人の男の子に出会ったが、するとかれはこれを殺してしまった。かれ (ムーサー) は言った。「あなたは、人を殺した訳でもない、罪もない人を殺されたのか。本当にあなたは、(且つて聞いたこともない) 惨いことをしたものです」。かれは答えて言った。「あなたは、わたしと一緒に耐えられないと、告げなかったか」。かれ (ムーサー) は言った。「今後わたしが、何かに就いてあなたに尋ねたならば、わたしを道連れにしないで下さい。(既に) あなたはわたしからの御許しの願いを、(凡て) 御受け入れ下さいました」。それから2人は旅を続けて、或る町の住民の所まで来た。そこの村人に食物を求めたが、かれらは2人を歓待することを拒否した。その時2人は、正に倒れんばかりの壁を見付けて、かれはそれを直してやった。かれ (ムーサー) は言った。「もし望んだならば、それに対してきっと報酬がとれたでしょう」かれは言った。「これでわたしとあなたは御別れである。さて、あなたがよく耐えられなかったことに就いて説明してみよう」。「舟に就いていうと、それは海で働く或る貧乏人たちの所有であった。わたしがそれを役立たないようにしようとしたのは、かれらの背後に1人の王がいて、凡ての舟を強奪するためであった。男の子に就い

ッラーは語りかけられた」(Q4:164) [の章句の通りである]。一瞬ごとに靈感の光 (nūr) が降りてくるといふ [ムーサーの] 偉大さと大いなる知識, 神に関する英知 (ma‘rifat) にも拘らず, 彼はヒドル——彼に平安あれ——に [その知識を] 求めたのである。ヒドルに会えるよう神に祈願 (du‘ā) し, 多くの泣訴と祈念 (munājāt) の末, ついにその願いと希求とを [神は] 聞き入れ, ムーサーにこのように話しかけられたのである。「行って, 彼のもとにたどり着くまでかの誠実なる我が僕を探し求めよ」。以下のように彼は [神からの命を] 遂行した。ムーサーは海のほとりにたどり着くと, ヒドルに会った。「それからかれは (岩のところに戻って来て), われの一人のしもべ (ヒドル) に会った」(Q18:65) [の章句の通りである]。 [ムーサーの] 視界 (dīda) と胸 (dil)<sup>(38)</sup>は彼 (ヒドル) との出会いによって明るく開かれ, そのたった一回の出会いから, 多くの望むものを得た。つまり, 「至高なる神には下僕がおり, 神がその下僕をご覧になると, 彼らに幸福 [の服を] を着せる」<sup>(39)</sup>のである。 [神の] 一瞥 (naẓar) でこのように [幸福の] 賜衣 (khal‘at) を着て, これほどの恵み (ni‘mat) を味わうのである。つまり, [そのような状態の時は] 「目は見えず, 耳は聞こえず, 心には思いが浮かばない」<sup>(40)</sup>のである。ヒドルに同行し親交を求める者は, 見えず, [恵みを] 味わわなくなり, 以下の通り, そのような者が神を愛する者 (‘āshiq) なのである<sup>(41)</sup>。

このように我々は君を見えなくさせる  
もしも君が見えるようになったのなら, 我々は悲しむ

ヒドル——彼に平安あれ——はこうおっしゃった。「ムーサーよ。我々について理解したことで満足せよ。帰ってから, 我々のことを話すのは危険である。その危険によってお前が害を被る

---

ていえば, かれの両親は信者であったが, わたしたちは, かれの反抗と不信心が, 両親に累を及ぼすことを恐れたのである。それでわたしたちは, 主がかれよりも優れた性質の, 純潔でもっと孝行な (息子) を, かれら二人のために授けるよう願ったのである。あの壁は町の 2 人の幼ない孤児のもので, その下には, かれらに帰属する財宝が埋めてあり, 父親は正しい人物であった。それで主は, かれらが成年に達してから, その財宝をかれら二人のために掘り出すことを望まれた。(これは) 主からの御恵みである。わたしが勝手に行ったことではなかったのだ。これがあなたの耐えられなかったことの説明である」(Q18:65-82)。

スルタン・ヴァラドは, このクルアーンの物語をベースにペルシア語の形にしなが, 理解のしやすさのために多少の脚色を加えており, クルアーン中に見られる元の物語とは細かな点で差異がある。<sup>(38)</sup>クルアーン 94 章 1 節「われは, あなたの胸を広げなかったか」及び, この章句に対しルーミーが ṣadr の語の代わりにペルシア語の dil の語を使用している (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 112) ことに基づき, dil の語を「胸」と訳出した。本稿においてこの部分を除いては, dil の語には「心」の語を充てている。

<sup>(39)</sup> 文中の表記からハディースであることが予想されるが, 管見の限り六書, 及びスーフイー系ハディース集としても使用される (Furūzānfar 1956) の中には見当たらなかった。

<sup>(40)</sup> スーフイー系ハディースである (Furūzānfar 1956, 93-94) 。

<sup>(41)</sup> 「愛はあなたの目を見えなくさせ, 耳を聞こえなくする」 (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 101) というハディースに基づく。但しルーミーの引用しているハディースはスルタン・ヴァラドの引用した直前にあるハディースとは異なる。

ことのないように」。ムーサー——彼に平安あれ——は正直さ (ṣidq) と愛によって嘆願し、彼ら (ムーサーとヒドル) はしばらくの間一緒にいたのである。道中、海辺で彼らは一艘の舟 (kaṣṭī) に乗った。その舟はまるで、その時代には何人にも作ることが出来ないような [素晴らしい] ものであった。ヒドル——彼に平安あれ——はその貴重な舟に穴を [あけたので]、すっかり使えなくなってしまった。ムーサー——彼に平安あれ——はおっしゃった。「このようなことを成すのは良いことはありません。というのもこの仕業は神の英知にも、聖法 (sharī‘at) にも反するからです。正義という試金石、[神の] 恩寵と聖法という天秤に対して、非常に純度を落とし、[重さを] 軽くするようなこと (kam ‘ayār) です」。するとヒドル——彼に平安あれ——はおっしゃった。「君は私とうまくいかないと言わなかったかね」。ムーサー——彼に平安あれ——はふと思いつき出した。「つい約束 (‘ahd) を忘れておりました。最初の罪は許す方が良い [の格言通り、ご容赦下さい]」。幾度もヒドルに [ムーサーは] 懇願し、ついにヒドル——彼に平安あれ——はそれを許した。

## 2章9節

それからまた時が経ち、彼ら (ムーサーとヒドル) は一緒に旅をしていた。とある島にたどり着くと、子供らの町 (kūdakān-shahr) <sup>(42)</sup>の中に、また年端も行かぬ1人の子供 (tifl) が見えた。その時代において、また地においてかの子よりもその美しさ (jamāl) と精妙さ (luṭf), 甘美さ (shīrīnī) において右に出る者はなかった。2人ともが驚きの余り、「ああ、何と素晴らしいアッラー、最も優れた創造者であられる」(Q23:14)と言った。するとヒドル——彼に平安あれ——がその子を慰みもの (navāzish) にし、愛でよう (dil-dārī) と子供らの中から外に連れ出した。その子の手を取って、一緒に [どこかへ] 行ってしまった。するとムーサー——彼に平安あれ——は驚いた様子で遠くから彼らの後をつけた。一体ヒドル——彼に平安あれ——はその子をどこに連れて行こうとしているのだろうか。[ヒドルは] 人々の目から遠く離れ、人里離れた場所に [その子を] 連れてくると、止まることもなく、ヒドル——彼に平安あれ——はその子を自分の足の下へと引っ張ってきて、その子の頭を切りつけた。ムーサー——彼に平安あれ——はそれを止めようと声の限り叫んだ。「あなたは罪もない人を殺されたのか」(Q18:74)。無垢で罪のない子を殺すとは、どうしてこのようなことが許されようか、と。ヒドル——彼に平安あれ——は言った。「お前は帰り、私と共に行くのはやめなさい。私の成すこと、話すことにあなたは耐えられないのだから」。ムーサー——彼に平安あれ——は我に返って言った。「私は間違っておりました。つい [あなたとの約束を] 忘れてしまいました」。ヒドル——彼に平安あれ——は言った。「なんとまあ冗長な話でしょう。毎回お前は私の成すことを否定して、こう言うのだ。『私は間違っておりました。つい [あなたとの約束を] 忘れてしまいました、と』」。ムーサー——彼に平安あれ——は言った。「神のために、今回もまたどうかお許し下さい。スンナでも3回までは [許すとい

(42) 写本によっては「町」がない版もある (Sulṭān Valad 1988, 12)。

うではありませんか」<sup>(43)</sup>。もしもまた「あなたの成すことを」私が否定したら、私の謝罪は受け入れられることはないでしょう」。

もしもまた私があなたに反対したら  
私が困っていようと助けには来ないように

ヒドル——彼に平安あれ——はこうして2回目の「ムーサーの」罪を、3回目の罪「をムーサーが犯した際に」はもはや同行せず、言い訳も謝罪も受け入れないという条件のもと許したのであった。

## 2章10節

この件のあと、また彼らが行動を共にしていた時のこと、旅の道中、7、8日間食料が手に入らず、空腹のために死んでしまいそうになったことがあった。困窮した状態では、聖法によって「本来」禁止されている死肉 (*gūsh-t-i murdār*) を食べることにについて、このような緊急事態であれば「許されるという」ファトワーが出されている。彼らはとある大きな島にたどり着き、壮麗で活気あふれる町を見かけた。「その島の住民は」非常に金持ちで、無限の富を持っていた。しかしながら彼らの家の壁にはひびが入っていたり、曲がってしまったりしていたので、その「壁の」上にいたのならば落ちてしまい、壊れてしまいそうであった。ヒドル——彼に平安あれ——は、その曲がった壁をまっすぐにし、ほころびを修繕してしっかりと立て直した。「その時2人は、正に倒れんばかりの壁を見付けて、かれはそれを直してやった」(Q18:77)。ムーサー——彼に平安あれ——は、この苦しみや空腹の後に恵みと安楽 (*navā*)、富 (*sīm*) と賜衣とを手にするために「壁を直す」支援をしてあげたのであろうと考えていた。「すると」ヒドル——彼に平安あれ——はムーサーの手を取って、別の方角へ向かって海岸から出発してしまった。ムーサーは我慢が出来なくなって、言った。「ヒドルよ、我々は空腹で死にかけました。死肉をむさぼり、禁止されたもの (*ḥarām*) ももはや許容されたもの (*ḥalāl*) となりました。あなたはあんな風に壁を修繕し、まっすぐに直しましたが、あのようなことは他の者には出来ません。あなたがまっすぐにして、直したのですから、あの非常に裕福な家から、少なくともあなたのされた仕事の賃金をもらったら、数日分の食料を彼らからもらえたのに。もしもあれらすべてをそのままにするのなら、少なくともパンのひとかけらでも、我々が食べられるよう、彼らから求めるべきでした。このような行いは聖法や公平さ (*insāf*) に適っておりません。誰もこれを許さないでしょう」。ヒドル——彼に平安あれ——は言った。「ムーサーよ。今やお前は間違い「を犯し」、3回「の猶予」は終わった。もはや謝罪はあるまい。『これでわたしとあなたは御別れである。さて、あなたがよく耐えられなかったことに就いて説明してみよう』(Q18:78)。この「お前の」3つ目の罪が私

<sup>(43)</sup> 「私は3度目に彼を赦そう」という少し言い回しの異なるハディースがある (al-Bukhārī 1998, no. 7507)。またムスリムにも似たハディースが収録されている (Muslim n.d., no. 7022)。

とお前の別離の要因となった。お前が否定したこの3つのことについて、お前に気付かせてあげよう。そうすれば否定するのではなく、承認する必要がある、自分が反対のことをしていると分かるだろう。さて、『舟について言うと、それは（海で働く）或る貧乏人たちの所有であった』（Q18:79）。舟に穴を開けたのは以下のような必要に駆られてであった。あの舟は、かの貧しく、信仰深く、行い正しき者らのものであったのであるが、私が心眼 (chishm-i sirr)<sup>(44)</sup>で見たところ、不信仰者ら (kāfirān) や圧政者ら (zālimān) が、自分たちの王を立てるためにその船を使ってムスリムの城へ攻め込み、善き者 (nikān) ら、信仰者ら (mu'minān) を破滅させようと企んでいたのだ。舟を壊れて使えなくしたのは、このようなことをさせないためである。『男の子に就いていけば、かれの両親は信者であった』（Q18:80）が、年若い子供を殺したのは以下のような理由からである。彼の両親は信仰者であり、聖者であったので、その息子から影響が及ぶことを望まなかったからである。[息子]は悪の本性 (jawhar-i bad) を有しており、両親をもまた信仰の道からそらせようとしていたのである。私が彼を殺したのは、この世から彼の悪事と不信仰とを消すためであり、彼の両親を不信仰から解放するためであったのだ。それ（息子）に関わることによって信仰の道から彼らを取り残されることのないように、彼らが目指すところにすっきりたどり着けるようにである。それはまるで、庭師 (bāghbān) が良い枝 (shākh) に力を得させるために悪い枝を切るのと同様である。またあの壁については、金持ちらが壁を壊し、傾けておいたのであるが、私はそれをまっすぐに、しっかりと直しておいた。しかし私はあれほどの困窮と苦境のさなか、彼らに賃金や報酬を求めなかった。それは以下のような理由による。彼ら（孤児ら）の父は信仰者であった。『（2人の孤児の）父親は正しい人物であった』（Q18:82）のである。注釈者らは、彼らの7代前の先祖も信仰者であったとしている。また幾人かは、彼らの70代前の先祖は信仰者であったとしている。これは被造物に対する助言 (pand) である。来世の宝物だけでなく、寛容<sup>(45)</sup>の宝物もが彼のものであるヒドルのように、7代前、あるいは70代前の先祖に敬意と尊敬を込めてこのように「壁を直すことを」実行したのであり、彼らの子孫に、このような奉仕 (khidmat) の後は誰の手によっても危険の生じないように「彼はそうしたの」である。あれほどの困窮と苦境の中にありながら、彼は賃金を受け取らなかった。あなたが貧しく、みじめで、罪深く、困窮からの救いを求めるのなら、聖者の息子らにこのように奉仕すべき<sup>(46)</sup>であるのだと推し量りなさい。

## 2章11節

タブリーズで、アリーの末裔 ('alavī) の1人がバーザールで酔っ払ってしまった。彼は嘔吐していたので、彼の顔やひげは吐瀉物や埃にまみれていた。信心深く (pārsā)、慎ましい名士が

<sup>(44)</sup> ヒドルにはアッラーから特別な慈悲と知識とが授けられており、この知識によって事物の内的意味、神秘を解し、将来を見る能力が授けられていたという（日本ムスリム協会 2012, 364）。

<sup>(45)</sup> 原文にはبخشとあるが、بخششと表記された版もある（Sulṭān Valad 1988, 15）。前者では意味が取りにくいので、後者の方が適切と考え上記の通り訳出した。

<sup>(46)</sup> 『ヴァラド版マスナヴィー』においても、スルタン・ヴァラドは、聖者の子孫らに現世で奉仕する者は、来世での報いを受けることが出来ることと強調している（Sulṭān Valad 1936 Vol. 2, 40）。

その状況を見て、彼に悪態をつき、唾を吐いた。同じ日の夜、彼は預言者——彼に平安あれ——が怒って次のように命じている夢を見た。『お前は私への奉仕を求めよ。私に服従することによって、天国の徒 (ahl-i bihiṣht) となることを期待せよ。バーザールの只中で吐瀉物に汚れている私を見たのに、なぜお前は私を家に連れて行かず、世話もせず、汚れを洗い落とさず、私を寝かしつけなかったのだ。神の僕らは自ら [進んで] 奉仕し世話をするのである。このようなことをお前は進んでせず、私のことを心に留めながら唾を吐くとは何事か! ?』名士は心の中で思った。『預言者様——彼に平安あれ——、私はこのようなことをいつしたでしょうか』。すると預言者は彼に答えて言った。『我が子孫は私そのものであると知らないのか。[我が子孫は] 我が肝臓である』<sup>(47)</sup>。もしもそうでないのなら、父の所有物と財産とは一体いつその息子へ渡されるというのか。名士は恐怖のあまり目覚め、例のアリーの子孫を探しあて、喜んで自分の家に招き入れた。そして自身の財と所有物の半分を彼に与えた。そして生涯にわたり彼に様々に奉仕し続けた。ヒドルはこれら3つの真理についてムーサーに解き明かすと、彼らはお互いに別れた。『これでわたしとあなたは御別れである』 (Q18:78)。

## 2章12節

上記の真意を強調するために以下の話が引き合いに出される<sup>(48)</sup>。とある聖者がとある聖者に言った。毎日至高なる神は私の前に70回も顕現 (tajallī) する。もう1人の聖者はそれに答えて言った。「君が男なら、行ってバーヤズィード (・バスターミー) (Abū Yazīd al-Bastāmī, d. 874/877) を一度見てみるがいい。この出来事から幾分か時が経って、この心清きスーフイーはアブー・ヤズィード [・バスターミーに会うこと] を決意した。アブー・ヤズィードは茂み (bīsha) の中にいたが、奇蹟 (karāmāt) によってかのスーフイーが自分に仕えにやってくると知っていた。アブー・ヤズィードはスーフイーの方へ歓待のために道を通って茂みから出てきた。茂みのそばで彼らは会った。スーフイーがアブー・ヤズィードに視線をやると、彼の祝福された顔を見て耐えられなくなり、途端に彼の身体は空っぽになり、この世から去ってしまったのであった。

## 2章13節

今や我々はアブー・ヤズィードがその中にいた茂みへやってきた。茂みの中の木は、彼が胸 (sīna) の中に有していた彼の思考 (fikr) であり、知識であり、神秘階梯 (maqāmāt) であった。スーフイーがそこへ着いた時、アブー・ヤズィードであるその茂みの中で一体誰が立って、進むことが出来ようか。アブー・ヤズィードは、スーフイーが彼を見ることが出来るようにスーフイーの方へ茂みの中から出てきた。こうして賢者が子供と言葉を交わす時のように、自身の知性と

<sup>(47)</sup> 文中の表記からハディースであることが予想されるが、管見の限り六書、及びスーフイー系ハディース集としても使用される (Furūzānfar 1956) の中にも見当たらなかった。

<sup>(48)</sup> バスターミーを実際に目にした入門者があまりの力によって命を落とすという話は、バスターミーに関する奇蹟譚としてアッタールの聖者伝などに類似の物語が収録されている (‘Attār 1957, 135-136)。



知恵の茂みから、子供の方へと外に出て、子供が理解できるようにと子供の知性の程度に合わせて言葉を発したのである。「彼らは人々に、その知性の程度に合わせて話す」<sup>(49)</sup> [の通りである]。かのスーフイーは自らの限度 (*hawṣila*) に即して神を見たのである。というのも彼はアブー・ヤズィードの、神の光と顕現とをその身に帯びたあまりの力によって、耐えることが出来ず死んでしまったのである。

## 2章 14節

ジブラーイールには神の顕現 [という役割] があつたが、彼はその [役割の] ために育てられたので、それ (顕現) 以外の仕事はないのである。[神との] 結合の海 (*daryā-i vaṣl*) の中で一生を過ごす魚と同様である。ムハンマド——彼に平安あれ——を至高なる神の下へと昇天体験へと連れて行った際に、ジブラーイール——彼に平安あれ——の力と位階 (*maqām*) <sup>(50)</sup> の所までムハンマド——神よ彼を祝福し平安を与えたまえ——と行った。ジブラーイール——彼に平安あれ——は自らの位階で止まったので、ムハンマド——彼に平安あれ——はおっしゃった。「さあ行きましょう。何を突っ立っているのです？」 [ジブラーイールは] 答えて言った。「『わたしたちは各々定めのある部署を持っています』 (Q37:164) 。この位階よりも先に行くことは私には出来ません。もしも一歩でも先に踏み出せば、私は燃えてしまう。足の先でも前に出したら私は燃えてしまう」。この後ムハンマドは一人で進み、神の美しさをその目を見た。「(かれの) 視線は吸い寄せられ、また (不躰に) 度を過ぎすこともない」 (Q53:17) 。

## 2章 15節

よって神を見る者は皆自身の限度に合わせて見るのである。蟻からスライマーンまで<sup>(51)</sup>、[この世の] すべてを神が育てているのである。すべての存在、すべての生き物は神の顕現から [生じるの] である。しかしながらスライマーンの顕現、蟻の顕現はどこなのであろうか。とある名士が 10 人の奴隷を有していた。[奴隷のうちの] ある者は 5 歳で、またある者は 10 歳で、同様に 20 歳の者、30 歳の者、50 歳の者、60 歳の者がいた。もしも皆が大人で、同じような歳 (*ham-sāl*) であつたり、名士への奉仕を続けていて、遂行していたりしたとしても、とある者の知性 ('*aql*) と能力 (*kifāyat*) は低いのに、とある者 [の知性と能力] はより高いのである。そのうちの 1 人 1 人がその名士と言葉を交わしたり、交際したりする時には、その人の限度に合わせて、

<sup>(49)</sup> ルーミーも同じハディースを引用している (Jalāl al-Dīn Rūmī 1983, 102) 。

<sup>(50)</sup> 天使の場合はいわゆる「神秘階梯」ではないと考え、上記の通り訳出した。

<sup>(51)</sup> クルアーン 27 章 18, 19 節に基づく。「やがて (スライマーンとその軍勢が) 蟻の谷に来た時、一匹の蟻が言った。「蟻たちよ、自分の住みかに入れ。スライマーンとその軍勢が、それと知らずにあなたがたを踏み躪らないよう」。そこでかれ (スライマーン) は、その言葉の可笑しさに顔を綻ばせ、(祈って) 言った。「主よ、わたしと両親に与えられたあなたの恩恵に感謝し、あなたの御喜びに与かる善行に励むようわたしを励まし、またあなたの慈悲で、わたしを正しいしもべの中に入れて下さい」 (Q27:18-19)。大王であるスライマーンから、蟻のような非常に小さな、取るに足らない生き物まで、の意味である。

年上の子に対して、またより能力の高い子に対して、と [それぞれ能力に合わせて] 振る舞うのである。小さい子に対して [そのように] したら、理解することが出来ないし、耐えることが出来ない。「愛しい者らよ、人に合わせて服は裁つものだ」。よって信仰者や聖者に対する神の顕現も同様で、彼らの段階に合わせて [神は顕現するの] である。神の光は、彼らがそれに耐えうる程度に注がれるのである。

## 2章 16節

神との結合の火と共にありたいと願う者は、風呂場 (*ḥammām*) が火で熱せられると、ついには風呂場の [熱さによって] 神との結合の火と共に倒れてしまうし、もしも火の源泉の中に立ち現れるのであるとしても燃えてしまう。完全なる者ら (*kāmilān*) はサラマンダーのようで、火の源にいる時は、魚が水の中のように生きていられるのである。しかし残りの信仰者や求道者らはこのような、なんの仲介もなく火から利を得るような力を持たないのである。よってこのように言う時がある。完全な人間や聖者に会うことは神に会うことよりも困難で難儀なことである、と。これは、聖者らと神とは別だというそれ自体が不敬であろうような意味ではなく、彼らはその [仲介もなく火から利を得るような] 力によって神を見るのであり、あなたの力や限度では [神を見るのに] 耐えることが出来ないという意味である。たとえ神を見るときは、それ (彼らの力) を求めるのである。あなたが完全になれば、彼 (聖者) との親交 (*ṣuḥbat*) によってあなたも彼が神を見たのと同様に神を見るであろう<sup>(52)</sup>。神は最もよく知られるお方である。

## 参考文献

- Abel, Abe. 1979. "Barṣīṣā," in *The Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> Edition, vol. 1. Leiden: E. J. Brill, 1055.
- Abū Dāwūd Sulaymān ibn al-Ash'ath al-Sijistānī. *Sunan Abī Dāwūd*, 5 vols., Ḥims: Dār al-Ḥadīth.
- Aflākī, Shams al-Dīn Aḥmad. 1980. *Manāqib al-'Arīfīn*, 2 vols., ed. by Tahsin Yazici, Ankara: Chāpkhānā-i Anjuman-i Tārīkh-i Turk.
- 'Aṭṭār, Farīd al-Dīn. 1957. *Kitāb-i Tadhkirat al-Awliyā'*. Tīhrān: Intishārāt-i Markazī.
- Bukhārī, Muḥammad ibn Ismā'īl. 1998. *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*, al-Riyād: Bayt al-Afkār al-Dawliyah lil-Nashr.
- De Vitray-Meyerovitch, Eva. 1982. *Maître et Disciple: Kitāb al-Ma'arīf*, Paris: Sindbad.

<sup>(52)</sup> スルタン・ヴァラドは特に聖者の言葉に耳を傾けることの重要性を強調している。そして教団員に対しては、特に耳を傾けるべきであるのはルーミーの言葉や、自分の言葉であると説明している。なぜなら、それぞれ異なる様子で存在する聖者たちの中でもルーミーはそれら一連の聖者の長だからであり、彼に比肩するようなシャイフは存在しないからである (*Sultān Valad 1936 Vol. 2, 255*)。そしてルーミーの言葉を学ぶためには、弟子らは彼のマスナヴィーを読むべきであるという。マスナヴィーは「その外見は詩であるが、その実クルアーンの解釈 (*tafsīr*) である」からである (*Sultān Valad 1936 Vol. 2, 256*)。つまり、スルタン・ヴァラドは、父のマスナヴィーを読み、ルーミーの言葉に耳を傾けることはクルアーンを学ぶことに通じるとして、具体的な方法論を示し、教団の持つテキストによって弟子の教育を行っているのである。またスルタン・ヴァラドは、自身の『ヴァラド版マスナヴィー』を読む功德に関しても、実際の体験者の声とともに記している (*Sultān Valad 1936 Vol. 2, 397*)。

- Furūzānfar, Badī' al-Zamān. 1956. *Aḥādīṭ-i Maṣnavī*, Tihṛān: Intishārāt-i Dānīshgāh-i Tihṛān.
- Jalāl al-Dīn Rūmī. 1983. *Kitāb-i Fīhi mā Fīhi: Az Guftār-i Mawlānā Jalāl al-Dīn Muḥammad Mashhūr ba Mawlivī*, ed. by Badī' al-Zamān Furūzānfar, Tihṛān: Amir-i Kabīr.
- Lewis, Franklin. 2008. *Rumi: Past and Present, East and West: The Life, Teaching and Poetry of Jalāl al-Dīn Rumi*, Oxford: Oneworld.
- . 2015. “Solṭān Valad and the Poetical Order: Framing the Ethos and Praxis of Poetry in the Mevlevi Tradition after Rumi,” in *Persian Language, Literature and Culture: New Leaves, Fresh Looks*, ed. by Kamran Talattof, London: Routledge, pp. 23-47.
- Massignon, Louis. 1922. *La passion d'al-Hosayn-ibn-Mansour al-Hallaj: Martyr Mystique de l'Islam, Exécuté à Bagdad le 26 Mars 922*. 2 vols., Paris: Paul Geuthner.
- Muslim ibn al-Ḥajjāj al-Qushayrī. n.d. *Ṣaḥīḥ Muslim*. 4 vols., Bayrūt: Dār Ṣādir.
- Sanā'ī al-Ghaznavī, Abū al-Majd Majdūd ibn Ādam. 2004. *Ḥadīqat al-Ḥaqīqah wa Sharī'at al-Ṭarīqah*, ed. by Mudarris Raḏavī, Tihṛān: Intishārāt-i Dānīshgāh-i Tihṛān.
- Schubert, Gudrun. 1997. “Sulṭān Walad,” in *The Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> Edition, vol. 9. Leiden: E. J. Brill, 651-652.
- Sulṭān Valad. 1936. *Valad-nāma yā Maṣnavī-i Valadī*, 2 vols., ed. by Jalāl Humā'ī, Tihṛān: Kitbkhāna-i Iqbāl. (in-house reproduction)
- . 1988. *Ma'ārif*, ed. by Najīb Māyil Haravī, Tihṛān: Intishārāt-i Mawlā.
- Tirmidhī, Muḥammad ibn 'Īsā. 2011. *al-Jāmi' al-Ṣaḥīḥ wa-huwa Sunan al-Tirmidhī*, 5 vols., Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmīya.
- Trimingham, John Spencer. 1998. *The Sufi Orders in Islam*, London: Oxford University Press.
- 日本ムスリム協会. 2012. 日垂対訳注解聖クルアーン. 日本ムスリム協会.

\*本稿は平成30年度公益財団法人上廣倫理財団助成金による研究成果の一部である。

東京大学大学院人文社会系研究科助教  
Assistant Professor, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo